

Survival Research

Thoughtfully Regards : The Arbitrary



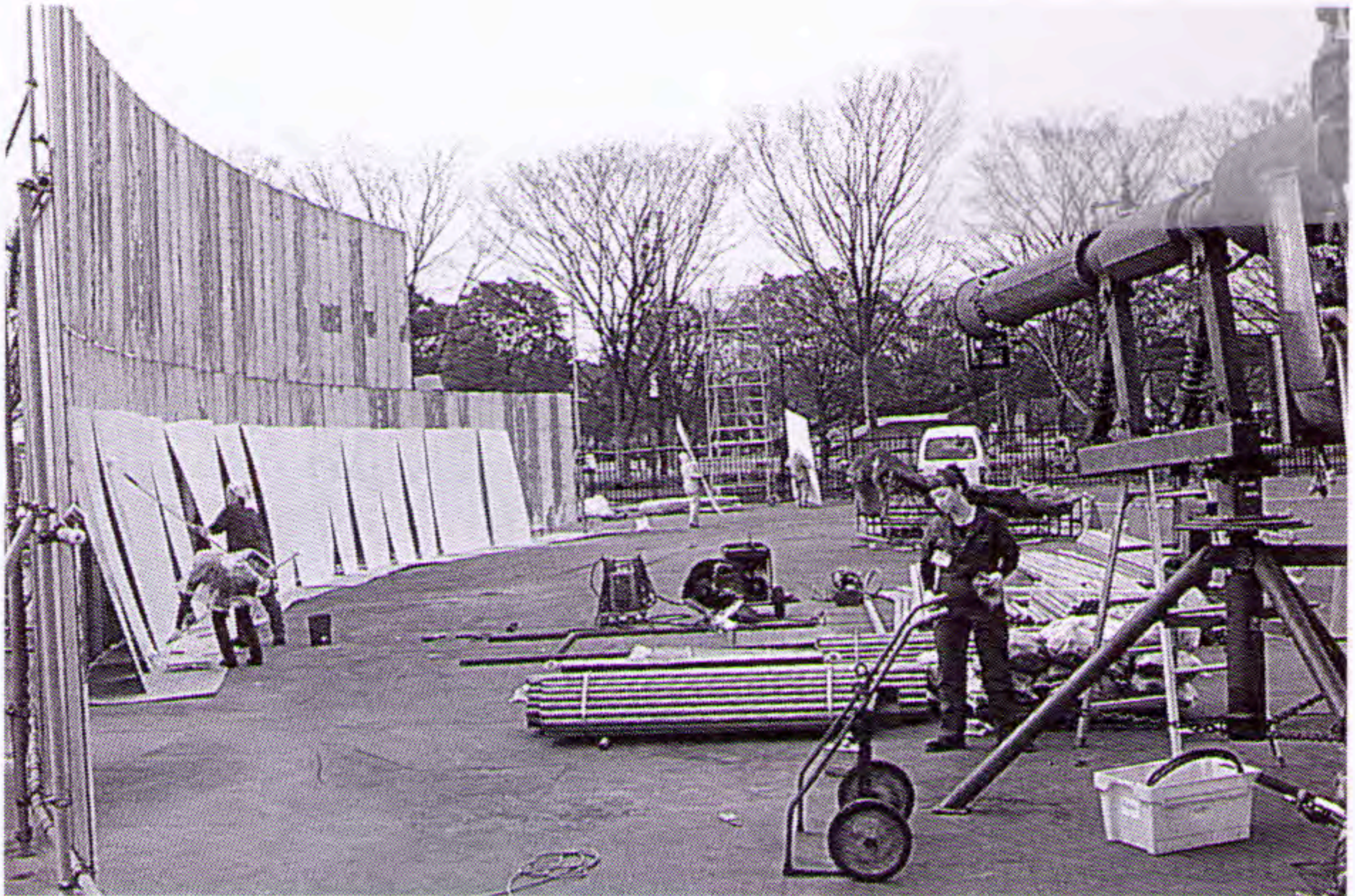
サヴァイヴァル・リサーチ・ラボラトリーズ
世紀末マシーン・サーカス!全記録

ron Laboratories

Calculation of Pathological Amusement
December 23, 1999
Yoyogi National Stadium & ICC
Tokyo, JAPAN



INTERCOMMUNICATION CENTER



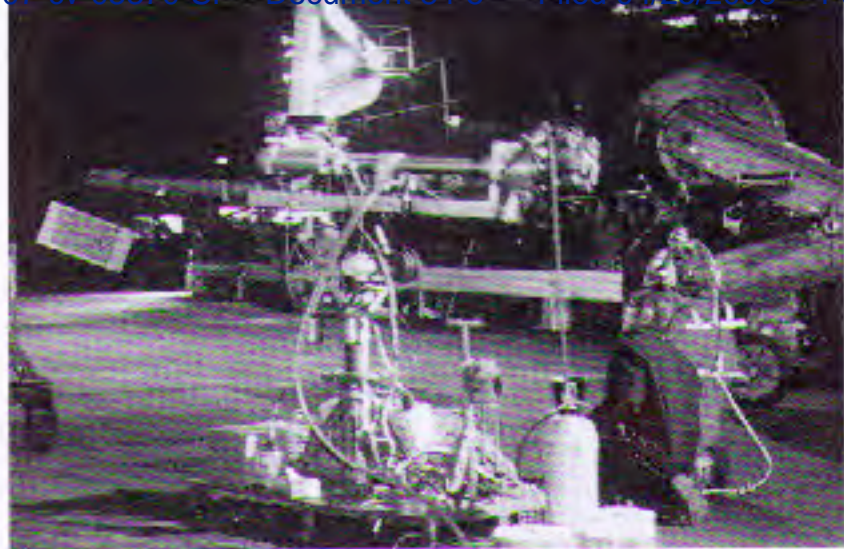
23

23・24 壊し物のトランプ・タワーにぶら下げるためのベニヤ板を塗装するダイアナ(24)と日本人スタッフ。手前右側(23)にはショックウェーブ・キャノンが移動されており、すでに砲座に据えられているのがわかる。



48

48 前日夜に到着したマネージャーのトッド(手前中央)を囲んでのメンバー・ミーティング。期間中は日本人スタッフも交え、毎日数回このようなミーティングが行われた。



79

78 ラジコンを操作するチップ。

79 エア・ランチャー。通常のコーラ缶に石膏を詰めただけの弾丸に加え、少量の火薬を詰めた弾丸もショーでは使用された。この弾丸は背景などに当たると爆発し、鉄板に穴をあけるほどの破壊力があった。

Survival Research Laboratories

Calculation of Pathological Amusement



イベント開催要項(プレスリリースより)

ICCプレゼンツ リアル／ネットワーク・パフォーマンス
世紀末マシン・サーカス!!
SRL(サヴァイヴァル・リサーチ・ラボラトリーズ)
「日本初のビッグ・ショー……」

「とて深い関係…病的な恋愛…」の気まぐれな計算

ICCはプレ活動から現在までを通して、従来の科学技術と芸術の領域を超えた表現の可能性を追求し、また物理的空間にも制限されない幅広い活動を指してきました。今回のSRLによる「世紀末マシン・サーカス」は、ICCとしては初めての、大型野外ショーとネットワークを結合したイベントです。

SRL(Survival Research Laboratories)は、九七八年にマーク・ポーリンを中心に結成されたパフォーマンス・グループです。一九七九年以来サンフランシスコにその拠点を置き、アメリカ、ヨーロッパ各国で四〇回以上のショーを行ってきました。

さまざまなジャンクなどから、巨大な三作りのマシンやロボットを作りだし、それをお互いに戦わせたり、演技させるその大規模なショーは、用途や目的、そしてそのための機能を剥きさらした「生の機械」たちによるマシン・ユートピアを実現します。そこには実用的な目的のためだけに機能し使用される、現代のハイテクノロジーによるマシンたちに対する、強烈な皮肉とユーモアがあふれており、それは結果的にハイテクノロジに陥らされ、また抑圧されていると感じている、われわれ現代人の心を解放するカタルシスをそなえています。一九八〇年代以降、何度か日本での開催が試みられてきましたが、そのスケールの大きさなどから、実現されませんでした。

ICCは、このSRLの日本初のスベクタクルなショーを、東京渋谷の国立代々木競技場屋外特設会場で開催すると共に、超高速度回線によりショーの高精細映像をICCや日本各地に送り、さらにICCよりネットワーク経由でマシンをリモート・コントロールする実験も行います。また準備作業も含めたショーの画像は、インターネットにより全世界に生中継(ストリーミング)される予定です。広大でリアルな空間で披露される圧倒的迫力のパフォーマンスを、現在最速クラスのネットワーク環境によって無限の仮想空間へと拡張を試みる、実験的なイベントとなる予定です。

日時

一九九九年二月二三日(祝)
午後六時開演・午後六時三〇分閉演(両会場とも)
*雨天決行

開催時間

約二〇～四十五分(予定)

会場

※メイン会場

国立代々木競技場 オリンピック・プラザ内特設会場

(東京都渋谷区神南二一〇一) JR山手線原宿駅東口より徒歩五分

※サブ会場

NTTインターコミュニケーション・センター(ICC)

ギヤフリーD

(東京都新宿区西新宿二二〇一) 東京オペラシティタワー

四階 京王新線初台駅東口より徒歩一分

入場料

無料(両会場とも)

定員

二〇〇名(代々木会場)／一五〇名(ICC会場)

*先着順 *事前予約は受け付けておりません。

主催

NTTインターコミュニケーション・センター(ICC)

協力

株式会社青木建設／株式会社マクニカ／日商エレクトロニクス株式会社／インターネットマルチメディア株式会社／株式会社NTTデータ／株式会社NTTコミュニケーションズ

宣伝協力

アップリンク

Survival Research

Thoughtfully Regards : The Arbitrary



SRL最初のマシン（一九七九年）



ヘックカート（左）、ボーリン（中）、ワートナー（右）



SRL最初の雑誌広告（一九七八年）

SRL活動小史

SRLは一九七八年、マーク・ボーリンによりアメリカ、サンフランシスコで結成された。SRLというグループ名は、ボーリンが雑誌「ソルジャー・オブ・フォーチュン」の企業広告から見つけたという。彼は大学で美術や演劇を学んだのであるが、いわゆるギャラリイや美術館などの閉ざされた美術の世界に興味を持てず、高校卒業後、軍事関係機関や工場などで働いていた技術的な経験に基づいて、ジャンクなどから独自のマシンを制作し、それによるパフォーマンスを行うというアイデアに到達したらしい。

彼は一九七九年よりサンフランシスコの街頭などでパフォーマンスを始め、一九八一年にはマット・ヘックカート、エリック・ワートナーが主要メンバーとして参加した。彼らの活動が一九六〇年代のアメリカの若者を中心とした、反体制的な大衆文化の系譜に連なるのは疑いないであろう。ボーリンたちが本格的に活動を開始した一九八〇年代前半は、一九七〇年代後半の、ヴェトナム戦争終結などによるいわばアメリカの歴史上初めての内省の時期を終えて、レーガン大統領による、「強いアメリカ」の復活が謳われ、社会の右傾化が進んだ時代である。アメリカは自信を回復し、強力なモラリズムのもと、「世界の警察」的な役割を果たそうとしていた。当時のサンフランシスコは、こうして体制化していくアメリカ社会や文化の中で、一九六〇年代の自由な風情を残す特別な場所だったらしい。SRLの活動はこのような状況下、まさにヘルズ・エンジェルズのような、カウンターカルチャー的なスタイルで始められたのである。SRLは彼ら一人を中心として徐々に活動を活発化し、一九八四年九月のニューヨークでのSFショーにマシンを展示して以降、サンフランシスコに限らず、ニューヨーク、シアトルなどアメリカ各地でショーを行うようになった。

活動を開始して数年間は、そのパフォーマンスは単独、もしくは数台のマシンを用いて行われており、純粋なマシン個々のからくり的な動きを呈するような内容であった。この時期より特徴的にみられるのは、マシンと動物などの死骸との混在、すなわち無機物と有機物の合体した表現である。それらのドロテスクな死骸は象徴的なシンボルとして扱われている場合もあれば、単なるマシンの装飾的な表現に留まるものもある。この動物の死骸の直接的な使用は、動物愛護団体などの強力な圧力により、一九八〇年代半ばごろから次第に行われなくなる。また、一九八一年後半〜一九八二年ごろより、火や煙といった特徴的な演出要素を使用し始めているが、この時期には彼らのマシンには具体的な「兵器」のイメージはほとんど見られず、素材で

あるジャンクなどの部品の寄せ集めの形態から、大きく離れてはいない。

一九八一年〜一九八五年にかけてのSRLは、無線などによるリモートコントロール技術や、マシンを自走させる構造を積極的に取り入れ、複数のマシンをパフォーマンス空間上で「演技」させて、一つの「ショー」を作りだす、というスタイルに変化している。すなわち、個々のマシンに独立した機能やショーにおける意味をもたせ、さらに破壊されるためのマシンや大道具などのいわばセツトが増加していく。こうした「破壊するもの」と「破壊されるもの」のドラマという、彼らのパフォーマンスの基本スタイルは一九八六年ごろにはほぼ完成し、動物の死骸の使用の後は比喩して「破壊するマシン」に「空」の具体的な形態上の引用も明確となっていく。

その後一九九〇年代にかけて、マシンはより複雑な構造へと進化しており、またショーの規模も大きくなっていく。一九八七年にはヘックカートが、一九八八年にはワートナーが脱退しているが、メンバー構成はボーリンを中心として、パフォーマンスの内容に合わせて適時増減するような状態となっており、マシン制作に直接関わるような主要なメンバーは「〇一二〇名程度、ショーの際には二〇一五〇名以上のヴォランティアのメンバーによって行われるようになった。一九八八年に初の国外（ヨーロッパ）ツアーを行い、一九八九年にはサンフランシスコのアートスペースで、コンピュータにより自動制御されたインスタレーションを展示している。一九九一年にはサンフランシスコ現代美術館のオープン記念イベントに参加、一九九六年にはアリゾナ、一九九七年にはテキサスで過去最大規模のショーを行っている。

ジャンクを主な素材とし、メンバーによる手作りのマシンを中心とするスタイルにはまったく変化はないが、彼らは決していわゆるロケータな技術にこだわるのではなく、積極的に新しい時代の技術やメディアをそのパフォーマンスの中に取り入れている。前述した一九八九年のインスタレーションにおけるコンピュータ制御をはじめ、たとえばインターネットについては、早くも一九九五年のショーにおいて、ISDN回線を用いてショーの画像中継を行っている。さらに近年はストリーミングによる画像中継、インターネット経由によるマシンの遠隔操作も積極的にを行っている。

現在、騒音などの内容的な問題などにより、本拠地サンフランシスコはもとより、アメリカ国内でもその大規模なショーは開催が困難になっている。NGO